

The Book and the Brotherhood に描かれる連続性について

井上 澄子

表題の ‘the Book’ は ‘聖書’ を暗示し、‘the Brotherhood’ は ‘Monastic brotherhood’、つまり「写本などの創作に従事した修道士の仲間たち」の含意があることに気付く。本来、Oxbridge が College から成る形になっているのは、大学が中世の修道院から派生して、聖職者の養成を目的としていた伝統があるからで、Fellow のレヴキストが妻帯せず、学寮に住み続けていたことや、学友フィールドが卒業後、修道士になったと述べているので、作者の意図が読み取れる。

オックスフォード大学の創立記念ダンス・パーティで、インテリ群像が踊るダンスの輪は、いくつもの渦巻を形成しながら、それぞれの渦巻の中心には、クリモンドとジーン、またジェラードとローズが核となっていて、その中心には「愛」と「友情」がある。渦巻は旋回を続けるが、偶発的な要因で反転して次の新たな渦巻へと連続して永遠に旋回を続ける。作中で、whirl, circle, scroll, spiral, screw など「渦巻」の類語が多用されている。人生という舞台上、クリモン

ドの「本」を巡り結成された後援会の仲間たちの描く友愛の渦巻は、聖書写本『ケルズの書』のカーペット・ページの場合と同様に、単体ではなく、必ず複数で表現されている。例えば、中心にはジェラードが居て、彼を取り巻くシンクレア、ジェンキン、ダンカンなどが、同性愛の色調を伴って描かれ、それぞれが主役ともなり、入れ子状に渦巻を形成する。同性愛のテーマは、アングロ・アイリッシュの出自と、『ケルズの書』のルカ伝福音書冒頭のページの挿絵をほうふつさせながら提示される。

またボイアーズ館に集う仲間のうち、リリーとジェラード、ローズとジェラードがワルツ曲に合わせて氷上のスケートで渦巻を描いて滑る。そこにファーザー・マックアリスターが偶発的にスケートしながら登場すると、ローズは反転してその渦巻に合流し、次の渦巻へと連続してゆくというふうに、人間関係は果てしなく捻り合わされて、あたかも人間組紐文様の様相を見せて描かれる。一人の主役によるのではなく、多数の登場人

物それぞれが主役となり、描出される図式に注目すると、人間関係の渦巻の連鎖が螺旋、組紐など聖書写本『ケルズの手紙』の抽象文様の世界をストーリーの運びによって描出しようとする、マードックの技法が読み取れる。

かつてジョイスは『フィネガンズ・ウェイク』で実験的言語を駆使して『ケルズの手紙』の宇宙のイメージを表現しようと試みた。ジョイスとはたがいに、きわめて異質の作家であるマードックは、渦巻状をなす抽象的な形象の絡まり合いが、次第に中心を移動させつつ連続してゆく世界の秩序をストーリーによって表現することを試みたと考察される。

マードックは「連続性」の概念を次のように表現している。ローズはジェラードへの「憧憬と愛」において善意の人であり、連続性の世界の住人であると述べ、一方ジーンは、クリモンドと共に連続性の世界の外側の偶発性をはらんだ実世界に生きているという。

かねてマードックは絵画など芸術作品を援用して作品のメッセージを提示するのだが、本作品ではマチスの絵画『ダンス』(Succession)のメ

タファーによって「連続性」を象徴した。またクリモンドをヒンドゥー教のナタラージャ（踊るシヴァ神）で象徴しようとしたものは、ヒンドゥー教の重要な特徴である「宗教的寛容の精神」であろう。ティマーがダンカンとの偶発的な愛の衝動の結果、被った精神的打撃により、「古い神」への信仰の喪失を体験したが、キルケゴールや、サン・ファン・デラ・クルスを読み、次第に救われてゆくプロセスを描いて、マードックは他者認識を可能にする「寛容」の精神が小説論の基本にあることを表明している。この作品中に『ケルズの手紙』の *intertextuality* は随所に散見できるが、『ケルズの手紙復刻版』の序文でU. エーコが、「未完の手紙であるが今後も連続して書き続けることが期待される哲学的大作の典型」と述べてように、本作品でもジェラードとクリモンドが「現代の善と魂」に関する思索の手紙を、今後も連続して書き続けるだろうとの予感を提示して、小説はここで閉じている。

本作品は、同性婚や宗教的寛容の精神など、時代の抱えている問題を先取りしながら、それを超える普遍的な世界観を提示している。